

人麻呂終焉挽歌群の構成について

森

斌

はじめに

万葉集では、人生の写実的な反映や、事実の描写ということ
を題詞と左注、歌の内容に認められて来たため、近年になり虚
構という問題が一方で提起されている。有間皇子・大津皇子な
どの歌は、伝承された仮託歌として認められる要素が強くあつ
て、皇子の実作でないとする研究者も多い。また、柿本人麻呂
作と題詞にありながら作者に対する疑問を生じている作品があ
る。その詠歌とは、石見に居て自ら死を傷んで作ったという挽
歌（2・二二三）である。この人麻呂自傷歌に続いて妻依羅娘
子・丹比某・或る本の歌が連続しているところから、二二三番
歌から二二七番歌までの五首は、人麻呂終焉挽歌群という呼称
が与えられている。

さて、これら人麻呂終焉挽歌群は、伝記的な事実の反映に基
づく歌であるのか、或は何らかの虚構に色彩られた内容なの
か、さまざまな考察が加えられている。さらに事実と虚構とい
つても、その理解には種々なる相違があつて、一様に解釈され

るものでない。そこで、五首の歌で構成された人麻呂終焉挽歌
群については、伝記的な事実が認められる内容であるか、また
は何らかの虚構に基づくものか、その判断の前提になる自傷歌
から、まず考察を深めたい。

万葉集巻二に収められた人麻呂終焉挽歌群とは、左記の五首
である。

柿本朝臣人麻呂の石見国に在りて臨死らむとせし時
に、自ら傷みて作れる歌一首

鴨山の岩根し枕けるわれをかも知らにと妹が待ちつつある

らむ（二二三）

柿本朝臣人麻呂の死りし時に、妻依羅娘子の作れる歌

二首

今日今日とわが待つ君は石川の貝に一は云は待は交りてありとい
はずやも（二二四）

直の逢ひは逢ひかつましじ石川に雲立ち渡れ見つつ偲はむ
（二二五）

丹比真人かの柿本朝臣人麻呂の意に擬へて報へたる

歌一首

荒波に寄り来る玉を枕に置きわれここにありと誰か告げなむ (二二六)

或る本の歌に曰く

天離る夷の荒野に君を置いて思ひつつあれば生けるともなし (二二七)

右の一首の歌は作者いまだ詳らかならず。但し、古本、この歌をもちてこの次に載せたり。

一、自傷歌とその題詞

人麻呂自傷歌の題詞には、万葉集中で極めて特殊な表現が見られる。「自傷」「臨死」という言葉がそれである。「自傷」という言辭を用いている題詞は、有間皇子歌(2・一四一)のみが他にあるだけである。「臨死」については、他に用例が見出せないが、ただ大津皇子歌(3・四一六)と家持歌(17・三九六二)に、それぞれ「被死」「殆臨_ニ泉路」と題詞に記された二例が近似しているだけである。まさしく人麻呂歌の題詞の表現とは、万葉集にその類型を見出し得ないと言つてよい。それは、有間皇子歌と家持歌の題詞を総合した内容である。ただし、漢詩にも目を向けたとき、大津皇子の「臨終・一絶」と題する一篇が懐風藻に載せられているのが注意される。

この大津詩については、小島憲之博士が平常から熟知してい

た某人の臨刑詩を頭に描き作詩したとき¹⁾、また中西進博士が中国の「臨終詩」を考察されて人麻呂歌の題詞に「自傷」「臨死」の語の使用されているところから、人麻呂も刑死者であったとされた²⁾。その意味からは、人麻呂歌の題詞は、まさしく有間・大津両皇子の題詞を総合した内容による。

さて、視野を少しく広げられるとき、自己の死を意識して詠まれた歌は、旅人・憶良にも見られるので、それらの歌を参考に

する。旅人は天平三年七月に薨じたのであるが、同年奈良の家で古里を歌っている。

須臾も行きて見てしか神名火の淵は浅さびて瀬にかなるらむ (6・九六九)

指進の栗栖の小野の萩が花散らむ時にし行きて手向けむ (6・九七〇)

当時常に死を意識しなければならなかったであろう旅人である。飛鳥川の淵瀬の変化や萩の花散る頃の神祭りが故郷を偲ぶ思い出であった。晩年の妻を哀悼する歌を多作していた旅人の姿は、そこにない。あるのは病気に悩みながら故郷に思いを馳せる姿である。

一方憶良は、天平五年に死んだと考えられるが、重病におちいつた時に、藤原八東が河辺東人に見舞いさせた返礼に歌を添えて

土やも空しくあるべき万代に語り続くべき名は立てずして

(6・九六八)

憶良は、妻と子を歌に詠んでいた。ところが、この一首は、己の人生を悔恨する。つねに「土」たることを願いつつ、しかし空しく人生を終えなければならぬ嘆きを吐露する。死を意識したとき、そこには妻の姿が見られなかった。人麻呂の自傷歌は、妹を歌う。この妹を歌うのは、もう一人いる。

家持は延暦四年八月に薨じるのであるが、天平十九年二月に越中で病死を考える程に健康を害している。長歌一首と短歌二首をものしているが、長歌の内容を踏まえている短歌を引用すれば、

山川のそきへを遠みはしきよし妹を相見ずかくや嘆かむ

(17・三九六四)

とあって、妹が登場している。

妹は引用した短歌のみならず長歌(三九六二)にも歌われているが、辞世歌的な内容の歌に妹が登場するのは、人麻呂と家持の二人ということになる。

ちなみに有間皇子は、「ま幸くあらば」(一四一)「椎の葉に盛る」(一四二)と旅の安全と不自由な環境を嘆く。また、大津皇子は、紀・朱鳥元年十月の条に「妃皇女山辺、髪を被して徒跣にして、奔り赴きて殉ぬ」と記す妻がいたにもかかわらず、「磐余の池に鳴く鳴」(四一六)という至福なる景物に己

の運命を見据えている。では人麻呂と家持が妹を歌うことは、如何に考えるべきなのであろうか。

家持は初めて国司になった二九歳の夏に越中に赴任した。それ迄には大宰府での経験があったところで、それは父旅人に伴われたものであり、国守として責任あるものと比較すべき経験でない。しかも、北国の任地に到着した早々に、弟書持の死が伝えられ、初めての越冬を体験した天平十九年二月には、自分も死を覚悟する程の病に臥してしまった。まさしく孤独な旅中の立場にも似たものではあるまいか。しかも妻は遠い京にいたのである。とすれば、人麻呂が石見の国で妻を思い出す境地と家持のそれとは、同一の内容があつてしかるべきと考えられる。

しかし、人麻呂の自傷歌には、一つの伝統的な手法が認められる。それは、行路死人歌と呼ばれるものに共通する内容である。歌に「知らにと妹が待ちつつあるらむ」と歌われているが、この言葉は行路死人歌の発想と同一のものである。行路死人歌の特徴については、神野志隆光氏が「行路死人歌が、『家を問ふ』という形で死者に向かいつつもそのすべないことをいい、彼が共感的につながっていたはずの、また死者としての彼をまつるはずの家人(妻)を喚起して歌うのは、死者の魂を鎮める気持をこめてであった」と述べている。人麻呂にもかかる立場から行路死人を悼む作品があり、「香具山の屍を見て」(四二

六)、「讃岐の狹峯島に、石の中に死れる人を視て」(二二〇) (二二二)が旅人の立場で死者の魂を鎮めた挽歌である。しかも、人麻呂自傷歌は、自作の行路死人歌(二二〇、四二六)に語句の類似をもつのである。

以上、人麻呂自傷歌とその題詞の特徴を考察して、「自傷」「臨死」の二語を題詞にもつこと、行路死人歌の伝統を踏まえつつ、自らの死を歌うなかに妹を登場させた歌であること等は、万葉集に類型を求め得ない独自の内容である、と認めてよいであろう。加えて人麻呂歌に近似した表現を認められるのは、挽歌に試みられた種々な技法の集大成する姿でもある。ではかくも特殊な性格を含む人麻呂自傷歌が実作であるのか、または仮託された歌なのであろうか。

二、実作と仮託

卷二に収められている相聞歌は、たった一首の例外になる長皇子が弟弓削皇子に贈った歌(二三〇)を除いて、全てが何首かの構成になる群をなしている。それらの群は、いずれも恋物語を漂わしている。卷二の挽歌も相聞歌ほどでないにせよ、やはり群と呼称すべき性格をもち、その歌群は死の物語を表わす構成になっているものが多い。人麻呂終焉挽歌群と呼称される五首も死の物語たる性格が何われる構成になっている。しかも人麻呂自傷歌、依羅娘子歌、丹比某歌、或る本の歌に詠まれた

終焉の地がいずれも鴨山、石川、海浜、荒野という異質なものである。その意味では、ある伝記に基づく事実というより、伝承された幾つかの説話を核にして、それぞれの歌が作られた可能性のあるものである。

人麻呂自傷歌に詠まれた「鴨山」の所在をめぐる諸論については、山を石見に求めるか、大和の近辺に想定するか、二分して考えてよい。石見に鴨山を比定する諸説については、梅原猛氏に詳しい紹介がある⁴⁾。現在六ヶ所ほどがその候補地に採り上げられているが、鴨山を石見に求めることは、題詞の「石見国に在りて臨死らむとせし」という表現を事実の投影したものとして判断したことになる。一方、鴨山の所在地に大和・河内を考えるのは、自傷歌に記された題詞を疑うものであり、その根拠としては、「依羅」という氏族名、或は地名、さらに鴨山・石川という固有名詞のいずれもが石見より大和の葛城・河内に縁があるところに、大和を中心にした地域を考えるのである。

従って、死に場所の相違、大和・河内などに縁がある固有名詞からは、人麻呂自傷歌の題詞は疑われる内容と言つてよい。

ところが、かかる根拠があるにもかかわらず、自傷歌を実作として考える研究者も多い。斎藤茂吉氏・梅原氏によって石見に鴨山を求めた論⁵⁾が有名であるが、渡瀬昌忠博士は、鴨山での横死を認め、人麻呂がその地で臨終の歌を残し、石川という異なる地で葬られ、そこで火葬・散骨された、と述べている⁶⁾。し

かし、依羅娘子歌二首（二二四・二二五）から火葬や散骨の風習を踏まえていると認め得たとして、何故に鴨山という地で葬られず、石川で葬送されたのであろうか。それ以上に問題となるのは、土橋寛博士も指摘する依羅娘子歌と人麻呂歌が贈答として認められる性格のないことである。⁷⁾

即ち、もし人麻呂歌を承けて作られたのであれば、その歌を踏まえた作歌態度や歌の内容が依羅歌に指摘できるのである。

同様に自傷歌と題詞に記された有間皇子歌（一四一）とそれに追和した長忌寸意吉麻呂歌（一四三・一四四）や憶良歌（一四五）の例を比較しても、人麻呂歌と依羅娘子歌に共通するものがないことは明らかである。ここに依羅娘子が人麻呂妻として登場するのは、石見相聞歌（一三一〜一三九）の次に彼女の歌が載せられていることなどを考慮すれば、人麻呂の石見妻が依羅娘子と人々や編纂者などに考えられていたためであろう。その依羅娘子とは、石見に居た人麻呂の妻なのであろうか。

依羅娘子については、石見に居た妻とする説と大和の妻とする説とがある。役人が地方官として赴任する場合、普通妻子を大和に残し一緒に赴任しないので、人麻呂が大和の妻を伴ったことも考え難い。とすれば名前が氏族名に基づくか、その住居のある地名に由来するかがほとんどであろうから、依羅という氏と地名との二点を考察する必要がある。ところが依羅が石見の地名にも氏族名にも古文獻には登場することがない。とす

れば、大越寛文氏が古代文獻に現われる依羅氏を河内・摂津・和泉の三国に集中する氏族としたことが重要になる。⁸⁾

また、鴨山と石川についても石見には確かなものが見出されていない。上野理博士は、大和の南葛城郡に上鴨・下鴨の二郷あって、高鴨神社が存在していて、加えて丹比氏の本貫の丹比郡が野中・依羅の二郷を有していたところから、依羅娘子の夫が丹比の豪族の一人であろうとした。⁹⁾ 依羅娘子の夫が人麻呂であるか否かの判断は別にして、神田秀夫氏が題詞の「石見国に在りて」の箇所を徹底して疑い、終焉挽歌群の舞台を大和・河内に移動させた程、鴨山・石川・依羅とは、大和・河内に縁のある言葉である。ここに到れば人麻呂自傷歌が実作であるとすることには、かなりおもしろい説明を必要とする。

土屋文明氏は、人麻呂の自傷歌だけが題詞に記された石見国での作とし、鴨山を生前の人麻呂が死後に埋葬されそうな場所、或は死後に行くことの子想される土地と考え、鴨山を大和にあるとして¹¹⁾いる。さらに伊藤博士は、人麻呂自傷歌と依羅娘子歌とが歌語りとした人麻呂自身の創作として、歌俳優が人麻呂で、石見相聞歌が宮延人にもはやされたため、その完結編に自傷歌と依羅歌とを創作して、彼自身が妻と夫とを演じた、とする説を述べている。¹²⁾ 但し、人麻呂自傷歌のみ生前にあらかじめ死を予想した実作とする渡辺護氏の指摘もあるが、¹³⁾ 死後の埋葬地を予想するとか、自作自演の死の物語が何故に要求

されるのか、また人麻呂自傷歌の内容が横死を暗示させているなどを加味するとき、実作にこだわることは、納得出来ない面が多い。

歌物語とは、虚構に基づきながら事実を風論的に語るものとして、或は真実を語るものとして、またその両面をも兼ねそなえているのであるまいか。土橋博士は、「喚情表現」というある状況をイメージさせる表現と「指示的言語」という事実を叙述する表現に分別している¹⁴。その区分からは、人麻呂自傷歌が行路死人の喚情的表現ということになり、自己の死を喚情表現で歌うことになる。かかる技巧をわざわざ使用するの、自作でないところの可能性が強い。さらに稲岡新二氏は、人麻呂石見相聞歌が「反歌二首」(一三二・一三三)と頭書されているところから、持統六年以後の作品に「短歌」と頭書されるとして、枕詞と対句の使用されている特徴なども踏まえて、人麻呂の石見国赴任が持統五年以前と決論している¹⁵。その立場からは、晩年に人麻呂が再び石見に行く可能性がとほしくなり、死地に石見が想定できなくなる。

人麻呂の自傷歌をあくまで実作として、表現に事実性を認めようとする限り、今後も新しい仮説が打立てられていくであろう。しかし、人麻呂歌が伝承に基づき仮託されたと考えれば、鴨山・石川・依羅などの固有名詞は大和と河内周辺に充分求め得るのであり、文献的に説明のつく問題になる。恐らく今後も

自傷歌が人麻呂作であるのか、はたまた伝承による仮託歌であるのかは、さまざまな立場と視点から考察されていくのであるが、現状で判断する限り仮託歌と認めるのが自然である。

以上、自作と仮託の問題を見て来たのであるが、題詞の信憑性はいちじるしく損われる結果になった。「人麻呂作」「石見国に在りて」「自ら傷みて」という箇所であるが、創作者・石見国などが伝記的な意味で信用できなくても、人麻呂終焉挽歌群は歌物語として構成され、そこに伝説の世界が広がっている。次節では、五首の構成について考察を深め、かかる世界を深って見ることにする。

三、歌物語の構成

人麻呂終焉挽歌群は五首で構成されていた。万葉集でかかる短歌五首の構成でまとまりを見せる歌群を示せば、次の九例が見出される。

- | | | |
|----|---------|----------------------|
| 卷二 | 九一〜九五 | 天智・鏡王女・鎌足 |
| | 九六〜一〇〇 | 久米禪師・石川郎女 |
| | 二二三〜二二七 | 人麻呂・依羅・丹比某・
或る本の歌 |
| 卷三 | 四四六〜四五〇 | 旅人 |
| | 四七〇〜四七四 | 家持 |
| 卷四 | 六一三〜六一七 | 山口女王 |

六七五〜六七九 中臣女郎

七七〇〜七七四 家持

七七七〜七八一 家持

これらの例では、卷三、四にある六つの歌群は、全てが個人の連作になっていて、卷二の三例と著しく性格を異にしている。また、人麻呂終焉挽歌群に続いて載せられた河辺宮人歌（二二八・二二九）には、題詞に和銅四年などの年代を示していることから、寧楽宮の標以後と藤原宮までの標に取められた歌には、資料的な相違も認められる。その意味からも、卷二の五首構成の歌群は、その他の卷の例と異質なのであるが、卷二の九一番から九五番歌に歌物語の構成と題詞の内容にずれを見せている例がある。

天皇の鏡王女に賜へる御歌一首

妹が家も断ぎて見ましを大和なる大島の嶺に家もあろまし

を一は云はく、妹があたり離れても見むに、一は云はく、家隔らましを (九一一)

鏡王女の和へ奉れる御歌一首

秋山の樹の下隠り逝く水のわれこそ益さめ御思よりは

(九一二)

内大臣藤原卿の鏡王女を娉ひし時に、鏡王女の内大臣

に贈れる歌一首

玉くしげ覆ふと安み開けていなば君が名はあれどわが名し
惜しも (九一三)

内大臣藤原卿の鏡王女に報へ贈れる歌一首

玉くしげみむまど山のさなかづらさ寝ずはつひにありかつ

ましじ 或る本の歌に曰はく、玉くしげ三壺山はく、 (九一四)

内大臣藤原卿の采女安見兒を娶きし時に作れる歌一首
われはもや安見兒得たり皆人の得難にすといふ安見兒得たり (九五)

引用した九一番と九二番とは、宮廷の奉仕をおえて退出する女官へ贈られた歌とその返礼をした答歌という挨拶の内容であることを中西博士が述べられている。¹⁶⁾ところが宣長の解釈では、この歌二首を恋歌と理解して、鏡王女を天智天皇の妃の一人に加えてしまふことになった。¹⁷⁾それ以後は、かかる二人の相聞歌として理解されている。しかし、本来そうした恋歌の内容でなく、もともとは儀礼に基づく挨拶歌である。九二番歌が鏡王女のこまやかな親情を比喻によって表現しているところに誤解も生れる原因があるにせよ、根本的なところにあるものは、九一番から九五番までの五首が天智天皇・鏡王女・鎌足という三人の恋物語を表現していると見做してしまふ構成に原因している。かかる解釈は、万葉編纂者のそれであったかも知れない。しかし、これらの五首を或る主題に統一された姿と理解しないので、九一番と九二番、九三番と九四番、そして九五番という三組に分けて、それぞれ独立させた姿が本来の鑑賞態度に必要なのである。特に九一番と九二番の贈答は、恋心を示す言葉が題

詞にも歌にもないにもかかわらず、親情表現を愛情表現と見做したところに誤解が生まれた例である。題詞の内容からは、かなり拡大した解釈が行われた例であるが、それと逆に題詞を信賴しすぎて誤読を犯した例もある。

但馬皇女の高市皇子の宮に在しし時に、穂積皇子を思ひて作りませる御歌一首

秋の田の穂向の寄れるかた寄りに君に寄りな言痛くありとも (一一四)

穂積皇子に勅して近江の志賀の山寺に遣はしし時に、但馬皇女の作りませる御歌一首

後れ居て恋ひつつあらずは追ひ及かむ道の隈廻に標結へわが背 (一一五)

但馬皇女の高市皇子の宮に在しし時に、竊かに穂積皇子に接ひて、事すでに形はれて作りませる御歌一首

人言を繁み言痛み己が世に未だ渡らぬ朝川渡る (一一六)

但馬皇女歌三首には、それぞれ詳しい作歌事情が題詞に記されていて、いかにも恋の発端からその終末までもが理解される歌物語の内容がある。しかし、この但馬皇女歌三首は、一括して理解すべき歌の内容なのであり、その意味で題詞を記せば、「穂積皇子に勅して近江の志賀の山寺に遣はす時、但馬皇女の作らす三首」などで充分なのである。引用した三首の共通したものからは、但馬が夫を変えなければならぬ程に追い詰めら

れたとき、その決意を「いまだ渡らぬ朝川渡る」と歌うのである。恋の始まりからその結びまでだが、状況の転換や発展として題詞に記されていても、それをもととの歌として理解すべきでない。恋物語、特に悲劇的な内容で伝承されていたことが、かかる叙事的な題詞にまとめられたのである。ところで、人麻呂自傷歌群はどうであろうか。

題詞の信憑性は、著しく損われるものであった。人麻呂作、石見国に在りて、さらに自ら傷みてという三箇所は、事実を語るものでなかった。とすれば、但馬皇女歌三首と同様に題詞に問題がある以上、一首ずつを分析して歌の理解を深めなければならぬ。そして、矛盾した内容があれば、それをさらに追求する必要がある。

人麻呂自傷歌については、既に採り上げているので、妻依羅娘子歌二首(二二四・二二五)についてまず問題とする。それぞれの歌に「石川の貝にくは云はは谷は谷に」^{は云は}「石川に雲立ち渡れ」とあるが、鴨山の歌に結びつけ、石川は鴨山に源があるとか、「石川の貝」がもともとの意味でなく、「石川の谷」が原型を伝えているとか、かかる説明で贈答形式になるという処理、或は死地と埋葬地との違いということが論じられている。しかし、「石川の貝に交りて」という表現は普通考えられても、「石川の谷に交りて」とはいかなる意味なのであろうか。古今集、竹取などに用いられた「交じる」の用例に「分け入る」の意があるとするが、

万葉集にはかかる用例がない。また「谷に分け入る」とは、どういふ行為なのであろうか。やはり原型が「石川の貝」なのであり、鴨山の歌と結びつけようとする配慮があった段階で「貝」から「谷」という鴨山を踏まえる解釈が生まれたのであって、その逆でなからう。

類想と類句ということは、第一首の「今日今日とわが待つ君は」が「今日今日と吾を待たすらむ」（5・八九〇）「今日今日とわが待つ君し」（9・一七六五）に類似した句であり、第二首の「雲立ち渡れ見つつ偲はむ」が雲を見て偲ぶという恋歌に類想表現（11・二四五二、14・三五一五、14・三五二〇、20・四四二一）が指摘できる。特殊なものとしては、万葉集で川に登場する雲は依羅歌一首（二二五）のみであり、古事記歌謡の、

狭井河よ雲立ち渡り畝火山木の葉さやぎぬ風吹かむとす

（二二一）

と表現された例がある程度である。川は霧が一般的であることから、霧を詠まず雲を歌う点に特殊な歌ということになるが、恋歌の雲を見て偲ぶという表現形式を踏まえたことが雲を登場させたと言える。

次に丹比某の歌であるが、題詞によると人麻呂の心になって答えたとある。そして「荒波に寄り来る玉を枕に置き」とあるのは、鴨山の歌が山中死を語っているのに対して対照的な水死

のイメージである。この水死を描いているのは、明らかに依羅歌の「石川の貝に交りて」とあるところからの連想が詠ませたのである。ただし、万葉集に登場する貝が全て海の貝であることから、「荒波に寄り来る玉」という表現になったのであり、その点に死地が川から海浜に変わってしまった。もしも依羅歌の原型が「石川の谷に」であり、その歌に報えたのであれば、丹比某の歌も「荒波に寄り来る玉」などと歌われなかったであろう。

水潜る玉にまじれる磯貝の片恋のみに年は経につつ

（11・二七九六）

右の歌でも知られる如く、玉と貝、そしてまじるといふ言葉は、連想しやすい言葉であり、依羅と丹比とが二対として理解すべき根拠にもなる。従って、依羅娘子歌と丹比真人歌の三首は、人麻呂自傷歌を核として誕生したものでなく、人麻呂の死を語る話に基づき、既に存在していた歌を利用したか、或は創作したかである。

さて、或る本の歌は、人麻呂自傷歌を踏まえているのであるうか、はたまた依羅と丹比某の歌の影響を受けているのであるうか。「夷の荒野に君を置きて」とあって、死地が荒野になっているが、万葉集から「荒野」の用例を探るとき六首が見出される。その内で三首が人麻呂の作（四七・二二一〇・二二二三）で、残る三首が金村（九二九）と東歌（三三三二）と或る本の歌

(二二七)となる。人麻呂歌では、荒れた山道を踏み越えて辿り着いた安騎野を「ま草刈る荒野」(四七)、送葬の行われた場所を「かぎろひの 燃ゆる荒野に」(二一〇、二一三)とあって、山中にある野のイメージが見られる。しかも、二二七番歌は

衾路を引出の山に妹を置きて山路思ふに生けりともなし

(二一五)

という妻の死を契機に人麻呂が作歌した挽歌の一首の類想歌にもなっている。さらに東歌の荒野の用例を示せば、

信濃なる須我の荒野にほととぎす鳴く声聞けば時過ぎにけり

(三三五)

とあって、山中の野に結びついて荒野が登場している。従って、作者名を欠く或る本の歌とは、人麻呂歌(二一五)に近似したものであるし、自傷歌にある「鴨山の石根し枕ける」という死の描写を直接に受けて、山中の荒野と捉えて作歌された内容にある。また万葉集の用例からは、荒野が埋葬の地になっているらしいことも知られる。

以上を整理するとき、人麻呂自傷歌を直接受けて作歌されているのが或る本の歌であり、依羅娘と丹比某の歌が人麻呂自傷歌に影響されずに呼応した内容を示していた。即ち、一見するとかなり矛盾した死地に思われても、鴨山と荒野、石川の貝と荒波に寄り来る玉、これら二つのグループに分類出来るので

ある。¹⁹ かく二つに分けられることは、当然人麻呂の死を説話として伝えられていたのであるから、その説話が二種類あったことになる。図で示せば、

①人麻呂山中死——二二三——二二七

二二四

②人麻呂水死——二二五——二二六

ということになる。

④は、人麻呂が山中に横死したという話に基づき二二三番が仮託され、妻の立場からの歌が添えられた。⑤は、人麻呂が溺死したという説話があり、妻がそれを知り嘆き、その妻に同情した丹比某が人麻呂になりかわって一首創作した。

かく二つのグループに分類できるのは、人麻呂挽歌によっても裏付けできそうである。④が誕生するためには、軽の妻の死体を山中で埋葬したとする挽歌(二〇七、二一六)、河島皇子の死地を越智野とする挽歌(一九四・一九五)、さらに香具山の行路死人を見て作った挽歌(四二六)などの影響も考えられるのである。一方⑤については、狭岑島の行路死人歌(二二〇、二二二)が海浜の死を語るものであり、出雲娘子を吉野で火葬したときに詠まれた挽歌(四二九・四三〇)が溺死であったりして、かかる歌の影響もあったであろうが、それ以外に石見相聞歌群(一三一～一三九)の影響が考えられる。

即ち、丹比某の歌は海浜の死を連想させているが、石見相聞

賦)

(森

歌で「石見の海 角の浦みを 浦なしと 人こそ見らめ 湯なしと 人こそ見らめ」(一三一) という海浜の描写、さらに「玉藻なす 寄り寝し妹を」(一三一) という人麻呂の石見妻に対する表現などは、印象深いもので、依羅娘子の人麻呂と相別れたときに詠んだ。

な思ひと君は言へども逢はむ時何時と知りてかわが恋ひず
あらむ (一四〇)

を、石見相聞歌と関連させて理解してしまつた程に、依羅娘子が石見妻を連想させる事にもなつたであらう。

ここに到れば、人麻呂終焉挽歌群とは、二種類に分けることが適當になるし、また人麻呂挽歌の集大成と呼称できる内容を含み持っていた。しかし、人麻呂の死を契機に誕生した歌物語でありながら、①と②とは本来個別に誕生したもので、互の交渉がなかつた。それにもかかわらず、独立した歌物語を統一させて構成しようとしたのが万葉集の人麻呂自傷歌群ということになる。その統一するイメージが石見相聞歌群なのであるが、一体いつごろに現在見られるような構成に配列されたのであるうか。

四、形成について

人麻呂の死がいつ頃であつたのか、その確証を得る事は困難

な問題である。但し、年代が知られる明日香皇女への挽歌(一九六―一九八)が一番新しく、文武四年に作られていること、寧楽宮と標目のある歌群に人麻呂の歌が載せられていないこと、この二点から恐らく和銅年間には死去していただろう事は、それ程の間違いを冒した推論でないだろう。とすれば、人麻呂に仮託された自傷歌を伴う歌物語が生前に生まれるはずもないから、元明朝以降に人麻呂の死を語る説話が誕生してよいことになる。

さて、人麻呂の死を語る伝承者については、中西博士が丹比島と人麻呂が扈從関係にあつてその庇護下にあつたとしたうえで、二二六番の作者である丹比某が笠麻呂であろうとされ、人麻呂の死を物語る伝承を丹比氏の人によって伝えられた、と指摘されている²⁰。かかる推論は、蓋然性の強い論拠に基づくが、その場合に依羅娘子歌を核として丹比某の人麻呂の立場から作歌した水死伝承を基とする歌物語が適當するであらう。人麻呂自傷歌に依羅娘子が直接に答えた内容の歌でない以上、人麻呂自傷歌群を構成する基礎になつた伝承も二種類考えられ、丹比伝承には山中死を含まないものであつた。従つて、全く別系統の伝承がそれぞれ誕生する段階、さらにそれが総合される段階ということも考慮しなければならない。

人麻呂終焉挽歌群の成立時期について触れた論では、高野正美氏が興味深い推定を示されている²¹。それは依羅娘子歌に用い

られた特殊な用字「且今日々々々吾待君者」(二二四)から類似する用字を比較され、

且今日々々々吾待君之 (9・一七六五)

且今日々々々云二 (10・二二六六)

の二例があり、「且」に心情を託した用字としてかなり漢籍の教養ある人物の表記という立場から、「何時曾且今登」(8・一五三五)の作者が藤原宇合であることに注目され、長屋王事件のあった天平初年頃を推定するのである。勿論用字だけでは可能性を示唆えたにすぎないにせよ、丹比氏の人に管理された伝承が氏族の手許より離れて、次に宮廷などで享受される必要もあるであろうから、歌物語の誕生の時期を知り得なくても、万葉集に収められるため文献に定着した年月の推論に有効である。

斌)

(森

一方、自傷歌を核とした山中と荒野で死去したとする伝承はどうであろうか。それを知る手掛りは、さらに曖昧なものかも知れない。しかし、二二七番の左注が参考になりそうである。そこには、「古本をこの歌をもちてこの次に載せたり」とあった。この左注の意味するところは、古本なる文献に丹比某の作品に続いて人麻呂の妻に仮託した作者未詳歌が既に記録されていたことを示す。二二七番が妻の立場から創作された内容にあったため、現在の構成に疑問を提示したのであるが、人麻呂自傷歌・依羅歌・丹比某歌・作者未詳歌という配列が古本に既に見

られ、しかし編纂者は納得できないために注記に及んだのである。

ちなみに巻一と二に登場する文献名は十二種である。類聚歌林・或本・紀・一書・旧本・或書・古歌集・古事記・金村歌集・古本・人麻呂歌集・一本であるが、古本なる名称は二二七番の左注と巻三以下でも一例(13・三二五七)用いられていて、或本には、この歌一首を以て、「紀伊の国の浜に寄るといふ鯉玉拾ひにと言ひて行きし君いつ来まさむ」の歌の反歌と為す。具らかに下に見ゆ。ただし、古本によりまた重ねてここに載す。

とある文中に記されている。
巻二の古本と同様に、ここの用例でも重ねて歌を載せることになるが、古本にあるのでそのままにするという判断を示している。かく万葉集の編纂者に権威ある文献に扱われているのが古本である。これに類似する名称と言えば、旧本が採り上げられる。旧本は巻一に二例あるのみであるが、

右の一首の歌は、今案ふるに反歌に似ず。ただし、旧本に此の歌を以ちて反歌に載す。故に今なほ此の次に載す。

(一五 左注)

右の一首の歌は、今案ふるに、和ふる歌に似ず。ただし、旧本この次に載す。故になほここに載す (一九 左注)とあって、編者が歌の内容に疑問があっても、旧本のままに記

載すると言わせる権威をもっている。

旧本・古本とは不思議な文献である。恐らく両者とも万葉集の基礎資料になったのであろうが、問題のある歌の注記にのみ登場している。しかも、ある権威までもが与えられている。前述したが、古本の成立した時点で既に人麻呂終焉挽歌群が現在の構成になっていたことは、ここで旧本の用例などから明確になった事実と思われる。では、古本とは、昔より存在していた文献の意味であらうか。

ちなみに古歌集なる名称が五例あるが、その用例中で、一九三七番の歌に「大夫の 出で立ち向ふ 故郷の 神名備山に」という表現がある。この長歌の言葉は、作者が旧都明日香を詠む平城京の官人であったと考えられる。とすれば、古歌とは平城遷都後の歌も含まれていて、恐らく天平年間と言った時代からは昔の歌になるが、万葉集の時代区分でいう第三期の歌も古歌と呼称されてよいことになる。古歌集に類似する名称としては、古集が考えられる。古集は巻七・一二四六番と巻九・一七七一のそれぞれ左注に出てくる。大神高市麻呂歌（一七七〇、一七七二）を含むもので、人麻呂とほぼ同時代の歌を収めているらしいが、古集というものの古歌を集めた文献で、古くから存在していないのであろう。

古事記も昔から伝えられたというより、元明天皇の時代から見て推古朝までが昔であることが名称になったと考えられる。

それと同様に万葉集に記された文献名で、旧と古が付けられていても、古くから存在して伝えられたというより、古い歌を集めた、或は昔の時代の歌などという意味でなかるうか。とすれば、元明・元正朝などを昔の範疇で処理できる時代は、やはり聖武天皇の時代であろう。従って、古本なる名称も成立が神亀・天平などの年号を考えてもよいことになる。

伊藤博士は、巻二の編纂が原巻二とその追補とに区分できるといふ理解である²²。その論理でいえば、人麻呂終焉挽歌群は追補された部に属する。その追補と考えられる人麻呂終焉挽歌群と構成的に対応する歌群が有間皇子自傷歌群である。

自傷という言葉は題詞にもち、その有間歌（一四一・一四二）を核として、長忌寸意吉麻呂の追悼歌（一四三・一四四）、憶良歌（一四五）、人麻呂歌集歌（一四六）と続く構成は、人麻呂自傷歌、依羅歌、丹比某歌、作者未詳歌という構成と明らかに同じ性格を示す。そこで渡辺護氏は、人麻呂歌集の歌の参加していることが人麻呂終焉挽歌群との呼応にあることを示唆されている²³。まさしくかかる指摘は、両歌群が極めて類似した歌の構成を採ることに起因している。その意味するところは、人麻呂終焉挽歌群の影響を考えるのであるから、両歌群の成立がほぼ同一の頃か、または人麻呂歌群が古いということにならう。その有間歌も伝承された仮託歌の性格が強いものであり、高野氏の述べる一人称で仮託して、その作者を明らかにしない古態の

歌物語ということになる。そこで形成ということが考えられな
いであろうか。

人麻呂自傷歌が作者を明らかにしない古態の歌物語の性格を
もちながら、万葉集に載せられたのは比較的新しいと考えられ
る追補の段階であつたらしい。つまり、万葉集に取り入れられ
た年月が人麻呂の死後かなり経ていたにせよ、元明・元正明と
いう時代に死の物語が存在してもよいのである。まさしく
人麻呂自傷歌は、人麻呂の実作にも似た内容があるのだし、そ
の他依羅・丹比某・作者不明のそれぞれの歌も人麻呂挽歌の集
大成の姿が認められた。やはり、古歌と呼称すべき性格がある
のは、後世の人々に模倣されたためというより、歌が詠まれた
その時代の影響であろう。しかも、その伝承には万葉集で考え
る限り、二種類があつたのである。別途に誕生した伝承を一つ
にまとめられたのが古本の段階と思われ、それが文献として記
録されたのが聖武天皇の初年頃であつたのであるまいか。ある
特定の時期に五首構成の歌群が一括して生まれたにせよ、それ
が現在見られる人麻呂終焉挽歌群に定着するまでに、人麻呂の
死を語る伝承の存在した時間の経過を無視することはできな
い。

思うに、その伝承が享受される道程で全く異なる死の伝承も
誕生するであろうし、また異なるものがまとめられて統一され
ることもあろう。統一する力とは、人麻呂伝記の誕生を意味す

る。即ち、人物伝記は、種々なる説を具体的に列挙せず、大胆
に切り捨てるが、統一させるかである。特に死とは伝記の興味
からは、欠くことのできない要素になる。従つて、人麻呂終焉
挽歌群とは、継ぎはぎの内容にあるのも死の物語が山中の死と
水死という異質なものでありながら、人物伝記の興味から大胆
に再構成したためである。

再構成された歌群は、自傷歌が山中の死を暗示しているにも
かかわらず、荒野の死を語る或る本の歌が最後に位置してい
て、少しく海のイメージが強い。その点に石見という長い海岸
線をもつ風土とも結びつくのであろうが、石見国とは京師の人
に妻依羅娘子を連想させていたのかも知れない。少くとも再構
成により終焉挽歌群を誕生させた人には、石見国が海と妻依羅
娘子をも結びつけるものであろう。

五、結 び

人麻呂自傷歌を中心に構成されている歌物語について纏々述
べて来たことは、自傷歌がその題詞と内容から仮託されて伝承
された歌であること、山中の死と溺死という二つの横死を語る
歌物語が原型であること、歌物語の性格が白鳳万葉と呼称すべ
き古態であること、現在見られる五首構成の歌物語が成立した
時期に神龜・天平などの年号を考えてよいこと等である。いず
れにせよ、原型が二種類の系統に分けられる終焉挽歌群は、五

首それぞれが人麻呂歌に類似した内容を指摘できるし、さらに統一させているイメージも石見相聞歌のそれである。従って、自傷歌が仮託されたものでありながら、人麻呂の相聞歌と挽歌との集大成であり、充分に人麻呂歌を知っていた人によって死の歌物語が作られていることになる。

ところで、日本書紀・続日本紀にも記載されない六位以下の人物が何故に死の物語―恐らく刑死者としてであろう―を生むのであろう。その死を歌物語としてまとめられながら、人麻呂の実人生は渾沌としたままである。その暗香の花でありながら、人麻呂終焉挽歌群は、確実に人麻呂伝記の誕生を意味することになったのである。

△注▽

- (1) 『上代日本文学と中国文学下』第六篇第一章懐風藻の詩
- (2) 「輶晦の歌聖―柿本人麻呂―」(『万葉の歌びとたち』所収)
- (3) 「行路死人の歌」(『万葉集を学ぶ第六集』所収)
- (4) 『水底の歌』第一部第一章斎藤茂吉の鴨山考
- (5) 『柿本人磨』鴨山考 『鴨山考補註』
- (6) 「柿本人麻呂の死」(大東文化大学日本文学研究』第十七号)
- (7) 「鴨山」の歌とその周辺」(『万葉』第九十九号)
- (8) 「柿本人麻呂終焉挽歌」(『万葉集を学ぶ第二集』所収)
- (9) 「人麻呂の死と河内・摂津の歌がたり」(『古代研究』第九号)
- (10) 『人麻呂歌集と人麻呂伝』Ⅱ晩年の歌
- (11) 『万葉集私注一』二二三番語釈
- (12) 『古代和歌研究3』第五章第六節人麻呂終焉歌
- (13) 「柿本人麻呂の生涯」(『万葉集講座第五卷』有精堂版所収)
- (14) 注7に同じ。
- (15) 「石見相聞歌と人麻呂伝―作品論による伝記の再検討―」(『万葉』第百三号)
- (16) 『万葉集(一)』(講談社文庫)九一番脚注
- (17) 『玉勝間』の二の巻に、「此女王も、天智天皇に聚れたる証にて、妹と共に思ひ奉れる也」とあって、巻四・四八八、四八九番を証拠としている。
- (18) 引用した但馬皇女歌については、拙論「但馬皇女歌の特質―万葉集巻二・相聞三首について―」(『広島女学院大学国語国文学誌』第九号)で論じた。
- (19) 升田淑子氏は、「柿本人麻呂終焉歌群小考」(『学苑』四八一号)で「終焉歌群五首を考える場合、まず歌の場の山と川との二つに分類して考えることが可能であろう」と述べている。鴨山と荒野を「山」として、石川と荒波を「川」とするのであるが、荒波に寄せる玉を川と結びつけるのは疑問を残す。むしろ、石川と海に共通する水死として理解すべきであろう。山中の横死と水死を語る伝承を考えるのであるが、歌群をかか二つに分類した考察としては、升田氏が最初である。
- (20) 注2に同じ。
- (21) 「人磨の自傷歌群」(『万葉の争点』所収)
- (22) 『万葉集一』(新潮古典集成)の三八九頁から三九〇頁には、「ただし、『寧楽の宮』の歌を含めて、現在巻一、巻二には、元明朝以後の追補と見られる歌がいくつかある」と述べ、追補として神亀などの年号を考えていられる。
- (23) 注13に同じ。
- (24) 注21に同じ。